審 査 の 結 果 の 要 旨

氏　　名　　早坂　由美子

本論文は、ブルガリアの 19 世紀における都市空間の様態をブルガリア正教徒商人の「交易」という視角から明らかにしようとする都市史的研究である。ここでの「ブルガリア」「19 世紀」「正教徒商人」という限定の付け方には著者の対象に対する深い考察があり、そこに本研究の独自のスタンスがよくあらわれている。すなわち 19 世紀のブルガリアは現在みる国民国家には十分成熟しておいらず、いまだオスマン帝国下の影響を受けていた。そのなかでブルガリア正教徒商人はムスリムに対して一見マイナーな存在とみられてきたが、実は本論がこれから明らかにするように活発で広範な交易活動を始動しており、彼らの都市や農村における存在形態と広域圏での商業活動の展開はブルガリアという地域をバルカン半島というヨーロッパの特異な地理的性格を下敷きにみるうえできわめて重要な位置を占める。

本論は序章と終章に挟まれて 4 つの章から構成されている。

第一章　19 世紀ブルガリア平野部の都市と交易・商業空間の章は、本研究の全体像を示す目的で先行研究と本論の関係、オスマン帝国下のブルガリア都市史をみるうえでの視点、とりわけソフィアやタルノヴォにおける商業地区の都市形成過程についてみずからのフィールド調査や資料調査にもとづいて叙述されている。この章は二章から始まる本格的なケーズ分析の序奏としての役割を果たしている。

第二章　ブルガリア正教徒商人の交易回路－ニコラ・ミンチョオル＆セルヴェリ商会を事例として－の章ではブルガリア正教徒商人の存在形態をムスリム商人との関係を意識しながらまずは定義づける。ここにおいて 19 世紀のブルガリア交易の担い手としての彼らの存在の重要性が徐々に浮かび上がってくる。とりわけ著者はニコラ・ミンチョオル＆セルヴェリ商会が残した膨大な経営史料を繙きながら、この商会がかならずしもブルガリア国内にとどまらずドナウ川舟運を十分に利用しつつ広範な交易回路を形成していたことを明らかにした。この商会はドナウ川水運だけでなく、陸路のネットワークについても熟知しており、水陸両面での交易網の把握が 19 世紀を通して着実に行われていたのであ

る。

第三章　ニコラ・ミンチョオル＆セルヴェリ商会とタルノヴォー商業施設の建設・利用と宗教施設への寄進ーの章では同じニコラ・ミンチョオル＆セルヴェリ商会の商業活動のうち、都市内における展開をタルノヴォという具体的な都市を素材として明らかにしたものである。そこではハジ・ニコリ・ハンおよびマアザと呼ばれる独特の商業施設が登場する。ブルガリア都市内での伝統的商業施設の存在形態について、いかにも建築史らしい手法で読み解きつつ、その売買や賃貸という施設管理・利用の実態にまで踏み込んでいる。本章の重要な点はこうした商業活動が単なる経済活動に限定されるのでなく、町の宗教施設の寄進という行為とも関係していた事実を発見したところにある。ブルガリア正教徒という属性と交易という社会活動は宗教的な施設を媒介として都市空間に具体化していったのである。

第四章　村と正教徒商人ーアルバナシのルソヴィチュ兄弟商会を事例としてーは一転して農村という場に目を向ける。ルソヴィチェ兄弟商会はやはり正教徒商人の商業組織であるが、ニコラ・ミンチョオル＆セルヴェリ商会とは異なり、アルバナシという農村にその拠点を置く。アルバナシという場は歴史的・文化的に由緒のある村であって、在郷にベースを置くことは交易活動の便宜性を超えた商人集団のプライドとアイデンティティを担保するものであった。ルソヴィチェ兄弟商会はそのなかでももっとも有力の家系による組織とみられる。本章では当家の交易ネットワーク・拠点形成というテーマでは上記三章と問題意識を共有しつつ、村落内にある正教徒商人の屋敷に着目しているところがユニークなところである。

従来、わが国ではブルガリアの都市史というジャンルの先行研究は皆無といってよく、この論文がその先鞭ということになる。ブルガリアという地域そのものと把握の困難さ、史資料の制約、言語的な壁などが立ちはだかっており、ここでの研究はかならずしも容易な仕事ではなったと想像される。そうした条件のなかで、ブルガリア語学力を武器に難解な商業資料を丹念に読み解きながら、19 世紀ブルガリア都市像をブルガリア正教徒商人による交易という観点から切り込んだ本論の価値はたいへん高いものと評価できる。よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。